

ダンス教育の「裾野」と「頂」

文=石原 久佳 (本誌編集長)

全国中高のダンス部の数と大会数は増加する一方だ。しかし、その人口や盛り上がりに対して、大会のあり方や底辺の拡大にはまだまだ課題があるようだ。今回は、教員が主導して公式大会を目指す「全日本高等学校チームダンス選手権」と、小学校の学級単位で参加できる「全日本小中学生ダンスコンクール」の取材を通じて、教育機関でのダンスの「頂点」のあり方と「裾野」の広がりについて考えてみたい。



▲横浜市立南台小から出場した2チームは金賞を獲得。

9/10

全日本小中学生ダンスコンクール
@代々木第二体育館



▲倉島先生の指導により精力的に活動する南台小のダンスクラブ。ダンスを通じて自主性と集中力が育っていく。

★全チームレポートは **DANSTREET** へ!

>>各大会の全チームレポートが **DANSTREET** (danstreet.jp) にて写真付きレビューされています。



▲バトルタイムではハイスキル連発!



▲選手宣誓は、学生らしく爽やかに個性的に



▲顧問先生によるジャズムーブも。中央は大会を主宰する緒方浩教諭。



▲小編成部門で優勝の熊本鎮西高校は「ダンスコース」の生徒が登場!



▲ストリート系ジャンルの活躍が目立つ(写真は愛知県丘学園高校)

9/18

全日本高等学校チームダンス選手権
@北九州メディアドーム

公式大会のないダンス部

野球部には甲子園があり、サッカーには高校サッカー選手権が、吹奏楽には全日本吹奏楽コンクールがある。どれもが公式大会であり、当然学校側も部活の校外活動としてその参加を認めている。しかし、ストリート系のダンス部には誰も認める公式大会は存在していない。その理由には、戦後から学校教育の中でダンスを、高体連(高校体育連盟)も高文連(高校文化連盟)も積極的に取り扱わなかったという経緯や、ダンス教育を支えてきた女子体育連盟が創作ダンスを中心に据えていたため、近年急速的に興隆し、教育機関の中では扱いきれない文化的出自を持つストリートダンスを、正式に競技として認める団体や連盟が存在しなかった状況があげられる。

では現状での高校ダンス部の大会の参加申請の状況がどうなっているかと言いつと、最もインターハイ(高校総体)に近い認知と歴史を持つ創作ダンス主体の「全日本高校大学ダンスフェスティバル」への参加ならばほぼ問題ないというが、それ以外の企業や団体が主催・運営する大会への参加については、ダンス部の顧問が大会の内容や参加の理由を学校側へ説明し、参加・遠征の許可あるいは遠征費の申請をしなくてはならない。公式大会ならばすんなりといく話だが、学校によっては企業活動につながる大会への参加を嫌う場合もあり、参加許可を得るには苦労することもあるという。まだまだ新しい部活動である、ダンス部の顧問の先生はさまざまな局面で苦労が絶えないのだ。

そして、企業主体の各大会はそれぞれ審査基準や大会規定が細かく異なっている(本誌64号参照)。学校側は、その大会の参加規定や規模、評判や信用度、参加校のレベル、日程、開催地などによって、それぞれが参加大会を選んでいくの

その経験を通して何を学んでいくかが重要。仲間との友情、規律、努力、上下関係……なんでもいですが、それがダンスを通じてできる環境をしっかりと支えていきたいと思います。

今後は、大会や連盟の認知度をあげ、北九州市に限らず開催地を広げていきたいと考えているという。

裾野としての可能性 小学校のダンスクラブ

ダンス大会が増え、出場校のレベルが上がると、常連校がしのぎを削る状況が続くと、逆に「格差」が生まれていくのも事実。これからダンス部や同好会を立ち上げようという学校と、すでに全国大会に何度も出場している学校のレベルを比べると、すでに天と地の差ができていく状況なのだ。もしそれがダンス部でダンスを始めるハードルになったら、教育機関でダンスを広げる意味では本末転倒だ。

初心者でも、下手でも、誰でも楽しくダンスができる。そんな裾野の広がりこそがダンス教育にとって一番肝要なことであるのだが、その可能性を押し広げている大会が「全日本小中学生ダンスコンクール」だ。小中学生のオープン参加の部(学外の有志のチームで参加可能)に加え、学校参加の部では小学校のクラス単位での参加が可能。ダンスのレベルを競い合うだけでなく、それぞれの目標をもって目指すことのできるステージを、朝日新聞という信頼のある大手メディアが主催しているという点で大きな意味を持っている。また、審査結果は順位にするのではなく、全チームに金賞・銀賞・銅賞のいずれかが与えられるというコンクール形式も、出場者にやり甲斐をもたせている点だろう。

その大会の学校参加の部の中で毎年金賞を獲得し、ひととき存在感を光らせるチームが横浜市立南台小学校だ。学校の

だろうが、審査基準のばらつきも含めて、どの大会を選ぼうが、万人が認める公式大会でない以上はどうにも取り組みが落ち着かない部分は残るだろう。場合によっては「練習試合」という申請で参加する大会もあるという。公的機関が認める公式大会としてのダンス大会、国が認めるリズムダンスの競技会の整備が、現在の盛り上がりや発展を持続させるために、最も必要とされているところなのだ。

そこで注目したいのが、今年の9月に決勝大会が開催された「全日本高等学校チームダンス選手権」だ。北九州市での決勝開催ということでもまだ全国的な知名度はないのだが、こちらはダンス部の顧問である高校の教員たちが有志で主導・運営する、最も他競技の公式大会に近い形の大会なのだ。代表を務めるのは、一般社団法人全国高等学校ダンス連盟の代表理事である緒方浩氏。20年に渡り高校ダンス部を支え続け、強豪校・北九州市立高校の顧問も務めている。

「今のダンス部が盛り上がりつつあるのは、ストリートダンスの人気なんですよね。だから、ストリートダンスを真剣にやっている部をきちんと評価する大会にしたいと思っています。」

今年で第6回を数えるこの大会、先生方による運営だから堅苦しい雰囲気なのかと思いきや、MCのカジュアルなムードや出場校の傾向など、思ったよりもストリートダンス色の強いコンテストのようだ。ここが、「コンセプトものやエンタメ色の強いダンス部が入賞傾向にある昨今のコンテストとは一線を画す部分。また、審査発表までの時間に行なわれた、出場校代表者によるバトル大会も、応援合戦も含めて学生らしくさわやかに盛り上がりつつあったのが印象的だった。」

「部活動の目的というのはプロのプレイヤーを育てることではないですから。3年間通してどれだけ真剣に打ち込んで

特別クラブとして平日は休み時間に短期練習、休日や夏休みは連日長時間の練習をこなしているだけあって、ダンススタジオの強豪チームにひけをとらないレベルとチーム力を持っている。特に、アクロバットや軟体技を駆使した動きは、独自の個性と言えるだろう。

「うちでは上手に踊ろうとすると私が注意します。技術は後からいくらでも学べますが、大切なのはその時々を目当てに向かうことです。それは、気持ちを込めることだったり、全力を出し切ることだったり、役になりきることだったり……たとえ下手でも、出し切る、やり切る、この方を大切にしています。それが教育現場におけるダンスの在り方かと思っています。」

そう語る指導の倉島先生は、教員になってからダンスを覚え、教育のなかでのダンスの可能性について長年研究を重ねているという。

「今の子供達には3つの『間』がないんです。ひとつは時間、遊び場である空間、そして仲間。ダンスはその3つを満たすことができると思っています。ダンスを通じて子供達が高め合い、学び合うことができれば、ダンスの効果がどんどん教育の中で認められていくと思っんです。」

小学校のクラブ活動や授業としてダンスが普及していくためには、指導者や時間調整などの課題はまだ多いというが、普段の学校生活の中で子供達が気軽にダンスに触れることができ、目標にできる舞台があるということこそ、ダンス界全体にとっても大きな裾野であることには間違いない。